

《書 評》

板橋拓己『黒いヨーロッパドイツにおけるキリスト教保守派の「^{アーベントラント}西洋」主義、1925～1965年』
吉田書店、2016年

作 内 由 子

本書は「西洋（アーベントラント）」という概念およびそれに基づくカトリック、キリスト教保守派の政治・文化運動を描き出した研究書である。本書において示されるのは、この「アーベントラント」概念が戦間期から戦後にかけてのカトリックあるいはキリスト教保守派の人びとによってどのような意味で、いかなる目的で用いられてきたのか、またこの言葉を通じていかなる秩序像が構築されたのか、さらにそれがどのように欧州統合へと結びついたのか、である。以下で本書の内容を簡単に紹介する。

序章はアーベントラントの概念とそれがヨーロッパ統合史にもつ意味が示されている。本来「西洋」を意味する地理的概念であった「アーベントラント」は19世紀以降、①中世のキリスト教的共同体としてのヨーロッパを憧憬し、②反個人主義的・反自由主義的志向を内包し、③エリート主義的な反大衆民主主義へ向かい、職能身分制秩序に基づく政治システムを推奨し、④神聖ローマ帝国を範とする反中央集権制を志向し、⑤非キリスト教的な「東」に対置される概念へと、政治的含意を帯びていく。「アーベントラント」とはこのようにフランス革命を否定する「反近代」的な特徴を持つ。

「アーベントラント」概念はこのように神聖ローマ帝国を憧憬し、地域統合を志向する。この側面から「アーベントラント」概念・運動は統合史研究の文脈で以下の二つの意味がある。①西側の自由主義陣営のなかで進められてきた欧州統合において「アーベントラント」の歴史は一つの淵源であるにも関わらず、反近代的であるがゆえに十分光をあてられてこなかったということ。②第

二次世界大戦後に欧州統合を推進したのはキリスト教民主主義のトランスナショナルなネットワークであることはしばしば指摘されることだが、同じキリスト教の運動である「アーベントラント」運動と照らし合わせることで両者の共通点と同時に重要な相違が明らかになること。

以上を踏まえて以下の章で「アーベントラント」概念・運動の具体的な実態が説明される。第一章では戦間期から戦後にかけてのキリスト教民主主義の国際ネットワークおよびその欧州統合への貢献について描かれる。戦前戦中のキリスト教政党の国際ネットワークは各国政党の利害対立や非民主主義的な体制に対する曖昧な態度によって必ずしも活発な活動は行われなかった。欧州統合への直接的な貢献をするキリスト教政治家の合意形成の場となるのは戦後の新国際エキップやジュネーブ・サークルである。

その後の第二章から第四章までは、ドイツ語圏のキリスト教保守派の「アーベントラント」運動と言説が議論される。第二章では第一節で戦間期のカトリック系雑誌『アーベントラント』の担い手が、多様な主張を繰り広げながらも、「[ドイツの統一]と[ヨーロッパの統一]を不可分のものと捉え、両者の結合とその同時の達成を目指す」点で共通していた点が示される。そして第二節ではその例としてラインラントの知仏派ヘルマン・プラッツの伝記と思想が紹介されている。プラッツは、西洋すなわちアーベントラントの全体性を唱え、偏狭な民族至上主義は退ける。その全体性の回復は、カトリシズムを通じて世俗化・個人主義を排し、有機的な秩序を作り上げることにより可能になるのである。

つづく第三章では、ナチ時代に「アーベントラント」という言葉が誰に用いられていたかが簡単に示される。ナチ政権は独ソ戦以来「アーベントラント」をプロパガンダに利用するようになった。しかし同時にナチに対抗する人々もこの言葉を積極的に用いたので、「アーベントラント」が戦後にもタブー化されずに使用し続けられたのである。また、オーストリアや中東欧でこの時期ハプスブルク帝国の再興を念頭に、「アーベントラント」概念が用いられており、この運動の主体が戦後に「アーベントラント」運動を担うことになる。

第四章が本書の中心部分をなす。第二次世界大戦後に「アーベントラント」

概念はドイツ語圏でもはやされた。戦争を引き起したナショナリズムに対するアンチテーゼとして、このような状況下で創刊されたのが雑誌『ノイエス・アーベントラント』（1946 - 58）である。この雑誌は初期には、主にカトリック左派によって担われ、戦間期の雑誌『アーベントラント』と密接な人的思想的連続性をもっていた。この雑誌は戦間期と同様、世俗化、個人主義、偏狭な民族至上主義を排し、連邦主義を前面に打ち出していった。

ところが、1949年から51年にかけて『ノイエス・アーベントラント』は政治化・右傾化し、反自由主義、反議会主義的な主張がなされるようになった。その背景には冷戦が本格的に始まり、反共主義が台頭したことにあった。すなわち、ソ連という「東」に対する「西」が強調されるようになったのである。さらに活動の中心がドイツ西部から南ドイツやオーストリアにシフトし、「中欧」への追憶が顔を出すようになった（第一節）。

雑誌の右傾化とともに、運動の組織化もなされた。「アーベントラント・アクション」「アーベントラント・アカデミー」が設立され、その中にCDUをはじめとする有力政治家を取り込んでいく（第二節）。

第三節ではアーベントラント主義者の世界像が欧州統合に関連する点について示される。①諸民族、諸国民、諸国家の協調や連帯、スープレナショナルな秩序の形成を目標とすること。②神に由来する、家族を基礎とした様々な秩序が重層的に積み重ねられたものとしての秩序像。③「補完性原理」を根拠とする権威主義的な職能身分制国家観。④「補完性原理」を根拠とするスープレナショナルな秩序像。これらの秩序観は対内的、対外的な国家の主権を否定し、また相互に平等な個人を基礎単位とすることを否定しているといえよう。

第四節はかくのごとく右傾化していったアーベントラント主義者たちと自由主義・議会主義を支持していた西ドイツ初代首相アデナウアーとの関係を論じている。アデナウアーはアーベントラント主義者たちの支持を求めて意識的にアーベントラントという言葉を用いた。その一方でアーベントラント主義者たちはアデナウアーの自由主義的な側面にもかかわらず、アデナウアーの欧州統合の試みを支持した。またアデナウアーの宰相民主主義と言われる強力な指導もアーベントラント主義者たちをひきつけた。アデナウアーはその政治的才覚

によって主張を異にする彼らの支持を獲得したのである。

以上のとおり戦後の10年間に勢力を伸ばしたものの、1950年代にアーベントラント運動はその反近代主義的な側面が暴き出され、衰退した（第五節）。第六節はアーベントラント主義者たちのその後が描かれている。

以上が本書の内容紹介である。さてこの書評では、本書の採用する方法をこれまでの筆者の業績を参照しつつ検討しよう。それは、筆者のものの見方についてと言いかえてもよい。

まず、筆者の業績を整理しよう。本書は、筆者が2011年から2016年の間に刊行した論文に加筆修正を加えたものである。本書の元になった論文は以下の通り。①「黒いヨーロッパ——ドイツにおけるキリスト教保守派の『西洋』主義」遠藤乾・板橋拓己編『複数のヨーロッパ——欧州統合史のフロンティア』北海道大学出版会、2011年、②「『西洋の救済』(1)——キリスト教民主主義・保守主義勢力とヨーロッパ統合、1925 - 1965年」『成蹊法学』第77号、2012年、③「『西洋の救済』(2)——戦間期における『西洋（アーベントラント）』概念の政治化」『成蹊法学』第79号、2013年、④「ヴァイマル期ドイツにおける『西洋』概念の政治化——ヘルマン・プラッツと雑誌『アーベントラント』」『地域研究』第16巻1号、2015年、⑤「『西洋を救え！』——アデナウアー政権とアーベントラント運動」『ゲシヒテ』第9号、2016年。

筆者はこれまで2冊の単著を公表している。『中欧の模索——ドイツ・ナショナリズムの一系譜』創文社、2010年および、『アデナウアー——現代ドイツを創った政治家』中央公論新社、2014年である。筆者によれば、本書は『中欧の模索』の直接の続編であり、また『アデナウアー』の姉妹編に位置づけられる（『黒いヨーロッパ』p. 214）。

本書を含むこれら3冊に通底する筆者の問題関心は、ドイツ（人）の文脈から、さまざまな人物を媒介として欧州統合（地域統合）を説明する、という点で一貫している。ここで筆者の描き出すドイツ（人）は、1871年に成立した統一ドイツに限定されるものではなく、ハプスブルク継承国に広がるドイツ人も含む。また、筆者は著書の中でさまざまな人物を登場させるが、それは複数の人物についてやり取りを描いたり、対比を示したりするのではなく、象徴的な

人物を選び出して丹念に描き出すという方法を採用している。『中欧の模索』および『黒いヨーロッパ』では、ある一つ概念について、これら人物の思想を挙げていくことによって全体像を示す¹⁾のである²⁾。

以上の共通する要素を念頭に、この2冊との関係をより詳細に探っていこう。それを説明する補助線となるのは、アイデンティティと思想と現実とがいかにか切り結ぶかという問題である。筆者は遠藤乾・板橋拓己「ヨーロッパ統合の前史」『ヨーロッパ統合史』名古屋大学出版会、2008年のp. 21において「ヨーロッパ統合の前史を要約的に叙述するには相当な限定が必要だろう。すなわち、「ヨーロッパ」という枠組み、アイデンティティを規定する「意識」のレベル、ヨーロッパを何らかの形で統合しようとする「構想」のレベル、そして、歴史的「事象」のレベルである」と記している。この「意識」「構想」「事象」について、筆者は3冊の著書で少しずつ異なる視座から描き出しているといえる。

まず、「意識」すなわちアイデンティティについて考えよう。『中欧の模索』および『アデナウアー』では、中心的なテーマとしてドイツのナショナル・アイデンティティが挙げられている。筆者のいうドイツ・ナショナリズムとは、国民国家に限られない「ドイツ人」による「ドイツ」に相応しい政治秩序」（『中欧の模索』p. 26）を指す。そして、アデナウアーはその「ドイツのナショナル・アイデンティティの彷徨を探求する」（『アデナウアー』p. 225）ために避けて通れない巨人であるとする。「中欧」は戦間期の地域統合構想で、他の地域に抗して「中欧」を統合し、ドイツがその中で「中欧」に組み込まれた周辺諸国を指導していくという考え方である。これが第二次世界大戦ののち、アデナウ

-
- 1) 小川有美は『中欧の模索』の書評において、「その内容は万華鏡のように分裂的」と評しているが、それは『黒いヨーロッパ』にも当てはまる（「書評 複雑なことを論じることに何の意味があるか——板橋拓己著『中欧の模索』を読む」『創文』535号、2010年、p. 19）。
 - 2) この点で、例えば高橋義彦がその著書『カール・クラウスと危機のオーストリア』慶應義塾大学出版会、2016年の中でカール・クラウスという一人の人物の思想にさまざまな人物の思想をぶつけていくことによって特定の人物の思想を浮き彫りにしているのとは方法が異なる。

アーがドイツをヨーロッパに組み込んだ結果、現在まで続く、「ドイツ人」による「ドイツ」に相応しい国際秩序としての「ヨーロッパ」という意識が形成されるに至った。この2冊では、地域統合とドイツ・ナショナリズムとが結び付けられていることに注意しよう。

その一方で、本書『黒いヨーロッパ』では、ドイツ・ナショナリズムが「アーベントラント」論の中で後背に退いている。筆者は、「アーベントラント」の構想が、ドイツの偏狭なナショナリズムと距離をおいていたことをたびたび強調し、「アーベントラント」とドイツ・ナショナリズムとを結びつけていない。

この違いはどこから来るのだろうか。それは、本書がドイツのカトリックについての本であるということがヒントになろう。本書では「ドイツ」のキリスト教保守派に焦点を当てるとあるが、むしろその射程はオーストリアを中心としたハプスブルク継承国まで伸びている。そして、本書の肝となる戦後のアーベントラント運動の右傾化した時期、まさに「その活動の重心も、完全に南ドイツおよびオーストリアへシフトした」(p. 132) ののである。ドイツ語圏のカトリックは、小ドイツ的な統一のあと周辺的な位置に置かれた。本書では、「アーベントラント」運動を通じて、統一から取り残された、あるいは統一によってドイツ国内のマイノリティに陥ったカトリックが、国民国家という近代的な秩序像に抗してより広域の秩序像を提示していく歴史が提示されているのであり、同時にそれは旧ハプスブルク帝国の多民族性への憧憬が強調されることになるのである。

筆者は「アーベントラント」がドイツ・ナショナリズムと無縁だったというつもりはないだろうが、ドイツ・ネイションの中のペリフェリーに位置する人々が民族至上主義からは距離をおき、国家や民族を超えてカトリック教説に基づく有機的な秩序を夢見た、という側面を強調しているといえよう。

さらにこの違いは、「中欧」構想と「アーベントラント」構想という二つの地域統合構想について、筆者が問題点として重点を置く位置の違いに結びつく。『中欧の模索』で筆者は地域統合が普遍的に直面する問題について3点挙げている。すなわち、①地域統合はそのものだけで完結するのではなく、域外の「他者」との関係が問題となること、②域内で立場の優劣が生じること、③域内の

「内なる他者」の問題である。「中欧」論では①だけでなく、優越するドイツ民族が中欧のその他の民族を率いるという意識から②、反ユダヤ主義の点から③も同じく重視されている。他方、『黒いヨーロッパ』では共産主義のソ連および物質主義的なアメリカという「他者」(①)が強調され、②③が後背に退いている。

筆者が①に加えて「アーベントラント」論の問題と捉えているのは、この議論の「反近代」性である。「アーベントラント」主義者は「反近代」の考え方に基づいて、一方で国民国家の枠を超えた地域統合を推奨するが、他方で反自由主義、反民主主義のエリート主義的な統治モデルを称揚するのである。『中欧の模索』が地域統合に内在する問題を抉り出したとするならば、『黒いヨーロッパ』では地域統合構想が反自由主義・反民主主義の思想とも親和的たりうることによって議論の重点があるといえよう³⁾。

ここまでで「意識」について3冊の本を対比した。次に、「構想」および「事象」について検討しよう。筆者は地域統合の思想(すなわち「構想」)を中心に研究してきた。その際、常に歴史的事象との関係が説明されている。もっとも、両者の関係は、著書によって一様ではない。『中欧の模索』では、時代ごとの歴史的事実と裏打ちされた個人の思想・構想が描かれている。『黒いヨーロッパ』では、むしろ構想には歴史的な背景があるのだが、それだけではなくアーベントラントという構想が実際の欧州統合という歴史的な事象にいかに関与したかが示されている。『アデナウアー』では、アデナウアーが政治家としてドイツをいかにヨーロッパへと結びつけたか、という歴史的な事象が中心的に描かれる。

さらに、アイデンティティとの関係を考えよう。『中欧の模索』では、アイ

3) なお『アデナウアー』は『黒いヨーロッパ』で批判されている美しく切り取られた統合史観に—おそらく意図的に—かなり忠実な形で書かれており、その点でこの二つの書物は統合のネガとポジとを構成しているといえる。前作から本作を読めば統合の背後に流れる時代錯誤の(しかし同時に必然的な)思想を覗き見ることになり、本作から前作を読めば、地域統合への斜に構えた見方を解毒する作用を持つ。

デンティティが揺らいだ際に「中欧」構想が表れるとする⁴⁾。『黒いヨーロッパ』では「アーベントラント」構想が戦後にアデナウアーを支持することによって現実の欧州統合に関与する。『アデナウアー』では、アデナウアーによってヨーロッパに組み込まれたドイツが、現在のドイツ・ナショナリズムを規定するという。つまり、この3冊で歴史的事象→アイデンティティ→構想→歴史的事象→アイデンティティ…というゆるやかな連関が完結している。

以上のように、筆者の関心は、この3者がどのような関係に立つのか、を示すことにあるといえる⁵⁾。この関係はいずれかがいずれかの独立／従属変数に立つ、という形で示されるものではない。筆者はあくまでも史料に基づいて何が言えるのかを丹念に洗い出すことによって一つ一つの関係を示しているのである。特に本書『黒いヨーロッパ』はナショナル・アイデンティティの問題をいったん脇へ置いて、構想がいかに現実の政治に影響するかという問いに焦点を当て、歴史的な禁欲さをもってアプローチした業績であるといえるだろう。

4) 「「中欧」をめぐる議論には「周期」が存在することが分かる。その「周期」を筆者なりに表現すれば、「ドイツ」という枠組みが問題化したとき、つまりはドイツ・ネイションのあり方が問われた時に、「中欧」構想は重要な意味を有して登場した、ということになる。…それゆえ自ずと焦点は、「ドイツ」という枠組みが危機に陥った時期、変化を被った時期に合わせられる。」『中欧の模索』p. 28。

5) 先に、この「意識」「構想」「事象」について個々の人物を媒介として説明する、と示した。筆者は人物に対して強い関心を持ち、彼らを通じてこの3つを説明する。その一方で、人物はあくまでもこれらを説明するための媒介でしかない。例えば『アデナウアー』という評伝は、評伝という形式をとりながら、それはむしろアデナウアーその人よりも彼が戦後に構築したヨーロッパの中のドイツという事象を説明しているのである。